

2022年11月13日主日礼拝

説教題「人間が幸いに生きる『矢印』」出エジプト記 20 章 1～4 節

主任牧師 加藤 誠

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」(出エジプト記20章2-3節)。

聖書が証しする神は、どのような神でしょうか。一つは、人間に見える姿や形をもたない、偶像に刻むことのできない神です。私たち人間の小さな理解にはおさまりきらない、スケールの大きな、自由に働かれる神であって、「お守り」のように人間の願い通りに持ち運ぶことのできない方です。もう一つは、聖書の神は愛の神であり、私たちに語りかける神です。私たちに日々語りかけ、交わりを求め、一緒に歩みたいと願い、私たちが応答して歩むことを喜ばれる神です。

イスラエルをエジプトの国から導き出した主なる神は、彼らに「十戒」を授けます。二枚の石板に刻まれた「十の戒め」です。それを「契約の箱」に収めて、礼拝所の一番奥に置いて、人々は礼拝したのです。この二枚の石板は神の偶像ではなく、あくまでも神の愛の語りかけを象徴しているものでした。イスラエルの人々は、荒野の旅において、日々主なる神に心と体に向け、一日一日神の語りかけを聴いて礼拝して歩む。その礼拝の大切さを学んでいったのです。

今朝読んだのはその「十戒」の第一の戒めです。「あなたは、わたしをおいてほかに神があってはならない」。この戒めをどう読むのか。ある意味でこれはとても危険な戒めです。たとえば今、ロシアがウクライナの領土を占領してプロテスタントの教会が次々に閉鎖させられています。ロシア正教のみが正しい宗教であり、プロテスタントの牧師たちを拷問し、ロシア正教への従順、情報提供の誓約を求めていると言います。「ロシア正教以外の神を拝むな!」。これまでの二千年のキリスト教の歴史においても、この戒めを誤って用いてキリスト教以外の宗教を弾圧してきた歴史を深く考えさせられます。そういう意味でこの第一戒は、非常に「排他的な要素の強い戒め」であり、よくよく注意して扱うことが求められます。

わたしは、「十戒」は、主なる神は私たち人間が幸いに生きるための「矢印」として与えられたのであり、「神さまの愛が込められている語りかけ」として聴くことが大切ではないかと考えています。20 章 1 節にあるように、主なる神はイスラエルの人々をエジプトの国という奴隷の家から導き出されました。神は再び彼らが奴隷とされることのないようにと語りかけておられるのであって、「わたし以外に神があってはならない」という戒めも、その神の招きのもとで理解される必要があります。つまり、イスラエルの一人ひとりが神から与えられた命を大切にし、尊厳を輝かせて生きていくための語りかけとして読むべきであり、それを考えるなら、「わたし以外に神があってはならない」という戒めをもって人々の信じる自由を奪

い、体罰を与え、奴隷化していく言葉として用いてはならないはずです。

では「わたし以外に神があってはならない」という神の語りかけは、どういう意味において「神さまの愛の語りかけ」なのでしょう。

私たちは基本的に束縛を嫌い、自由に生きたいと願います。ただ、私たちがほんとうに何でも自由にできる生き方が私たちみんなを幸せにするのか。よくよく考える必要があります。「自由に生きる＝自分の欲望を神にして生きる」であるなら、毎日争い、奪い合い、傷つけ合いが生まれるのは必然です。力ある人のもとで誰かが奴隷のように扱われることも平然と起こっていく。そのように「自分の欲望」を神にしがちな人間に「それは違う」「欲望、お金、力をあなたの神にしてはいけない！」と真剣に語りかける神を私たちは必要としているのではないのでしょうか。

ある母親が死を前に子どもたちを集めました。「遺産を渡しておきたい」というのです。子どもたちは驚き、色めき立ちました。「母さんに遺産があったのか！」「いったい一人当たりどれだけお金がもらえるのだろうか！」と。母親は「箱を持ってきなさい」と長女に指示します。長女が箱を開けると一枚の紙が入っていました。その紙には「愛神愛隣」と書かれていました。母親は言いました。「これが、あなたたちに遺していく、わたしの大切な遺産だ」と。そして母親は子どもたち一人ひとりに語りかけます。「生まれてきてくれてありがとう。母親として未熟なる自分を母親としてくれてありがとう。神さまが一人ひとりに与えられた個性を自分がどれだけうれしく思ってきたか。これからも神さまを愛することを真ん中にして、お互いに助け合って生きていってほしい」と。その母親の言葉の前に子どもたちは自分たちの浅ましさを深く恥じました。そして自らの人生の最期に「人が生きるために一番大切なこと」を改めて教えてくれた母親に深く感謝したのでした。

私たち人間は、自分たちのことを本気で愛して「これが大切だよ！」と本気で語りかけてくれる存在を必要としているのではないのでしょうか。その意味で「十戒」は、イスラエルの人々が再びお金や力を神にして、その奴隷になりさがることなく、一人ひとりが神さまからの愛を受けた主体として、自分を大切にし、お互いを大切に幸いに生きていくための「矢印」が示されている、主なる神の愛の語りかけなのではないかと思うのです。

旧約のイスラエルは、この「十戒」を神の語りかけとして礼拝所の一番奥に安置して礼拝をささげました。新約聖書に生きる私たちは「十戒」ではなく、主イエスの「十字架」を礼拝の真ん中に仰いで生きていきます。主なる神と私たちをつなぐのはもはや「十戒」ではなく、主イエスの「十字架」の恵みのみが、私たちを神の愛につなぎとめるものだからです。この方の「十字架」に込められた神の愛の語りかけを、日々大切に受けて生きていく。「今、この世界を生きることは、荒れ野を旅するようなものだけれども、わたしがあなたたちと共に歩む」と宣言して下さっている愛の神さまに聴き従っていきたいのです。